

研究分野のキーワード：ドイツ語、格変化、語順、分離動詞、受動文、機能動詞構造

研究紹介

私はドイツ語を研究対象としています。ドイツ語は英語と同じゲルマン語に属する言語です。英語と似た部分もありますが、違う部分もあります。まず目につくのは名詞に性（男性、女性、中性）の区別があり、それぞれ異なる定冠詞（der, die, das）がつくという点でしょう。そして英語と最も異なるのが格変化するという点です。格変化というのは日本語の「～が、～の、～に、～を」などの意味が冠詞の変化によって示されるということです。英語では語順により文の意味が示されますが、ドイツ語は格変化により文の意味が示されます。そのため日本語と同じように語順が比較的自由なのです。（格変化により意味が表されるので、語順にとらわれる必要がないのですね）あと従属文では動詞が文末に置かれたり、形容詞に語尾がついたり、前置詞に格支配があったり、分離動詞や再帰動詞があったりとゲルマン語の古い文法形態をかなり残しているのがドイツ語です。

さて私はドイツ語の中でも特に機能動詞構造を研究しています。これは動詞を名詞化して動作名詞とし、これが文法的機能しか有さない機能動詞（英語学で言う軽動詞）と結合した慣用句です。たとえば英語には come to a decision という慣用句がありますよね。これはドイツ語では zur Entscheidung kommen という句に相当します。しかし使い方は相当違います。たとえば英語では、

The Committee came to a decision. (委員会は決定に至った)

ところがドイツ語では、

Das Problem kommt zur Entscheidung. (問題が決定されるに至った)

何とドイツ語では動詞 entscheiden の受動文に相当する表現になるのです。面白いと思いませんか？ なぜドイツ語ではこうした表現が可能になるのでしょうか？ 最近の論文にも書いたのですが、私は動詞の名詞化にその秘密があると考えています。詳しくは私の論文を読んでいただけたらと思いますが、研究にあたって何よりも重要なことは理論を根拠づけるための証拠固めです。言語学も科学である限り、事実を客観的に見る必要があります。そして客観的な事実から理論を打ち立てるのです。自分の主張を裏付ける証拠を集めるために、インフォルマントテストやコーパスなどを用いた例文収集を日々行っています。

皆さん！ 難しいことは抜きにして、まずはドイツ語の勉強から始めてみませんか。新しい言葉を学ぶことは未知の世界への旅立ちです。ドイツ語を勉強すると英語だけでは見えてこなかった世界が見えるようになります。こうした視点は英語を専門とする人にとっても重要です。ぜひ英語以外の言語を学んでください。教室で皆さんに会えるのを楽しみにしています。